

応化会だより

昭和41年 第2号

早稲田応用化学会発行

巻頭言

母校紛争の教えるもの

前会長 山本 研一

今年の1月以降、わが母校の創立80年以來の大規模な学生騒動に迄発展した今回の大紛争に就ては、ジャーナリズムのトップ記事とさえなった関係で、経過は既に御承知の事と思うが、教職の一端を担う者として、責任を痛感すると共に、本会々員諸氏に多大の御心痛をおかけした事を深くお詫び申し上げる次第である。

何事にも原因と結果がある。紛争がおきた原因を究め、反省、改善なくしては、解決は勿論、将来の発展も望めない。この大事件にはそれなりの深い因果関係があると思うが、紛争の示唆する原因を厳しく追究する必要がある。幸にわが理工学部では学部当局や各科教職員の適切な処置で、最後には正常派学生の主張が通り、期末試験も無事修了し、5月6日からの新学年の授業も正常に行われている。しかしわが学園全体としては未だ紛争の全面的解決に至っていないが、会員諸氏への御報告と今後の御協力を期待する意味で、敢てこの問題を取上げて、将来、改善、改革への心構えとする積りである。

この紛争の直接の原因は学費の大巾値上であったが、慶大の場合と異り、学費値上の問題が、かねて待機していた革命家気取の共闘派幹部活動学生に旨く利用され、後に紛争への何人かの仲裁者迄、手を引かざるを得なくさせた事や、大学本部当局が紛争処理を誤り、事件が長引くにつれ、戦後日本の大学が共通に抱く病根、弱点を集約的に母校が露呈したことも、誠に不幸な事であった。それらは早稲田学報を初め各誌に多くの批判、評論として論議されてきたので、ここには紙数の関係で紛争の主因と思われる幾つかのものを分類整理して簡単に個条書きとし、またこの大紛争の教えるものを考察してみた。

第1は経済的ないし社会的、政治的原因によるもの

で、(イ)これは戦後の私大に共通の問題であるが、戦前には官大と私大との授業料の差は殆んどなかったが、現在は大変な違いとなってしまった。しかも現在の学費は国情から考えて殆んど限界点に来ている事。(ロ)そのため大学は多数の学生を入学させ、また近年の高度経済生長より産業界の要請もあって、多くの私大は多数教育に踏切ったため、マス・プロ教育の欠陥を暴露し、悪循環を始めた事。第2は新制大学制度そのものからの遠因で、(ハ)戦前の旧高专や旧制大学を画一的に大学に昇格もしくは格下げしたため、古い一流大学へ膨大な志願者が殺到し、しかも国公立は少数の定員制を固執したため、大学生の70%を私大が引受けざるを得なくした事。(ニ)大学院制度に対する国の企画が初めからゆがめられていて、母校も余りに膨大な学部学生を抱え過ぎ、大学院中心の大学への発展の気魄を欠いた事。第3は母校に内在した原因で、(ホ)安保騒動以來、一部狂信的活動学生は外部勢力の指令を受け、大学自治の傘の下に、学内を政治闘争の場とし、連日、学則を無視する行動をとっていたのに、十数年間も放任して、初期のうちに禁止し得なかった事。(ヘ)この紛争の初期に、学費問題に限って共鳴し、ストに加った学生大衆も共闘派幹部の暴走について行けず、以後、脱落して傍観派ないし無関心派の無気力な羊群と化した事。但し理工学部のように各学科で所属学生をがっちりと掌握している所では、正常派学生が自ら立上って総意を結集して、少数共闘派幹部の専断を是正して正常化した。(ト)母校の制度、組織、特に責任体制の欠陥からくるいろいろの原因があるが、細部に亘るので省略する。また大浜総長も3選、12年の長期に亘れば、いくら名総長でも、疲れ、独善的にもなり易く、理事会も経営者気取りで教授会の充分な納得も得ずに、大巾の学費値上を強行した事。

以上、今回の紛争に対する幾つかの原因をあげたが、なおこの外に、細かい多くの副因が考えられるが、今回の紛争の教訓として筆者が特に痛感した事を次に略記する。まず計画的暴力に対しては、今、大学が如何に無力であるかという事。我々の説得力も所属学科の学生位で、思想的に偏向した異質のスト派活動学生に

対しては説得も全く無力であること。将来、社会のエリートとなる大学生でさえ、組織されなければ力を結集できず無気力な羊群に過ぎず、一匹狼にさえ勝手に追まられる。反対に僅か数百名に過ぎない一握りの狂信的活動学生グループでも、戦略戦術を練り力を結集すると如何に強力となる事か。これを防衛するため、教師側も学生側も平素よりの組織作りと、この方面の教育が如何に重要なことか。また大学自治の美名が却って両刃の剣となり、彼等に旨く利用された事や、不法占拠や無法事態が起っても、大学が恰も治外法権の場であるかの如く錯覚して、やむを得ざる警官導入を大学自治の破壊なりとヒステリックにきめ付けた社会の一部評論家や世論に対しても強い抵抗を感じる。

一般の学生は学費を取め、大学の学生となっている以上、学生の人権として唯一のものである学ぶ権利、授業を受ける権利がある。殊に今回、入学した約1万人の新入生諸君は改正学費を納得の上で入学したのであるから、一日も早く授業を受ける権利がある。それをスト権が確立しているからと称し、校則を無視し、パリケートを構築して、一方的に1ヵ月以上も新入生の学ぶ権利を掠奪したことは、人権蹂躪で、暴力以外の何物でもない。なお学生のスト権であるが、勤労者の場合には、官公労を除き、労働法その他でストライキの権利は法律でも認められているが、学校と学生の

場合には教育の場として、教育基本法、学校法人法、その他によるも、スト権などはあり得ず、多数決に束縛されることなどあり得ないと信ずる。

戦前には「大学の自治」、アカデミック・フリーダムは時の政府の干渉や国家権力から大学を防衛することであったが、戦後の現在の日本では、学外勢力の指揮により、イデオロギー的に偏向した一部活動学生の無法の暴力が大学の自由、大学の自治を、内部から、自ら破壊していることを、学生大衆も社会も強く銘記すべきである。

現在、世論のスト派学生に対する批判も漸く厳しく、また総長、理事その他の幹部も近く陣容を改めて紛争処理に向われると思うが、我々も学生と共にこの紛争の教える所を深く謙虚に反省して、母校再建の意気込で改革すべき所は断固改革して、禍を転じて福となす方策をとらねばならない。なお現在、理工学部では部、科毎の教授学生連絡委員会などを設けて種々の改善策を企画している。

最後に、大学の生命は永遠である。筆者は嘗て西欧の創立500~700年にも及ぶ古い大学が時流に超然とし、国家や民族の興亡を超えて燦然として輝く理想の大学像に接し、讃嘆したが、そこ迄行かずとも、せめて母校が米国の古い私大を範として、今回の紛争の教訓を生かして、独自の存在の理由を誇示でき得るよう

に在りたいものと思うのである。(昭41.5.6記)

◇ 会員の皆様へ ◇

応用化学科が設立されてから今年で50年を迎え、この間、応用化学会は年々多数の会員を加え、皆様の御努力により益々隆盛となって参りました。

当会に於ては、応用化学会報発行による学会活動もさることながら、大勢の会員の方々に満足していただけの会にしたいものと念願して居ります。この計画として、「応化会だより」の発行による会員間の親睦を計り、又出来るだけ多く卒業生と接触の機会を得る様、見学会、講演会等を持ちたいものだと思います。さて、この様な計画を行う上に於ても基金が必要であります。応用化学会費だけでは充分とは申せません。基金の集め方には色々方法があらうかと思われまますが、現在不況を続ける社会の状況から判断すると、大々的に集めるのは無理の様であります。従いまして、任意寄付にしたならばと考えて居ります。この集めた分は、会の活動のために使用するもので、個人が応用化学会をよりよく活動出来る様にしたいとの御希望があれば、その額はわづかであっても寄付して頂き、少しでも会を改善して行きたいと思えます。これはあくまでも、任意寄付であって、有志の方々の御好意によるもので、目標額等は問題の外であります。我々の心のふるさと応用化学会へのささやかな御援助を期待する次第です。

(会長 水野敏行)

教室だより

化学工学コースの現況

わが国において、国立諸大学では近年地方新制大学に至るまで化学工学科が設置された。早稲田大学応用化学学科においても、化学機械協会（現化学工学協会）の初代会長を昭和11年から13年までなされた故小林久平先生の古くからの御指導もあって、教室としてその強化に努め、昭和38年に化学工学コースの設置を見たのである。その後内容の充実につとめ、昭和40年3月には化学工学コースの第1回卒業生を社会に送り出した。昭和37年の早稲田大学創立80周年記念事業に、その趣意書にあるように化学工学分野の充実が唱われ、昭和40年4月に化学工学コースは応用化学科より一足先に西大久保の理工学部新校舎に移転して、相当充実した諸設備を有するに至っている。その教育、研究陣や設備の点も未だ不足の感もあるが、ここでは、化学工学コースの研究、教育および移転後の諸設備の現況の概要を紹介し、御参考に供したい。

1. 化学工学コースの研究、実験設備の概要

化学工学コースは西大久保の理工学部新校舎の10号

館1階にあり、研究室2、実験室7、大実験室1、倉庫・工作室1で、有効床面積575.2m²を有している。その詳細と配置、また主なる設備は図1、および表1に示す通りである。

実験装置の2~3の例を写真に示したが、有効高さ3m余を有する実習用ガス吸収塔や連続晶析装置のパイロット・プラントなどの大型装置から精密測定装置に至るまで実験の系統に応じて分類配置されている。

2. 研究活動

研究組織：化学工学における研究を推進させるために幾つかの研究グループが組織されている。これらの研究グループは化学工学コースのスタッフをはじめ、大学院博士課程・修士課程、学部学生など10名位で構成されている。研究はこれらの組織を通じて、企画され、実施され、そして討議される。これらの研究グループとその内容および最近の著書および論文の一例を示すと次の通りになる。

- (1) 輸送現象論研究グループ（城塚、平田、佐野、酒井ら）……境界層理論；諸操作の基礎的機構；運動量、熱、物質、反応同時移動など
- (2) 抽出研究グループ（城塚、平田、村上、高橋、松下ら）……抽出装置の開発；液々抽出機構、固



正面入口より化学工学コースの研究実験室を望む

図 1

化学工学コース（10号館1階）配置図

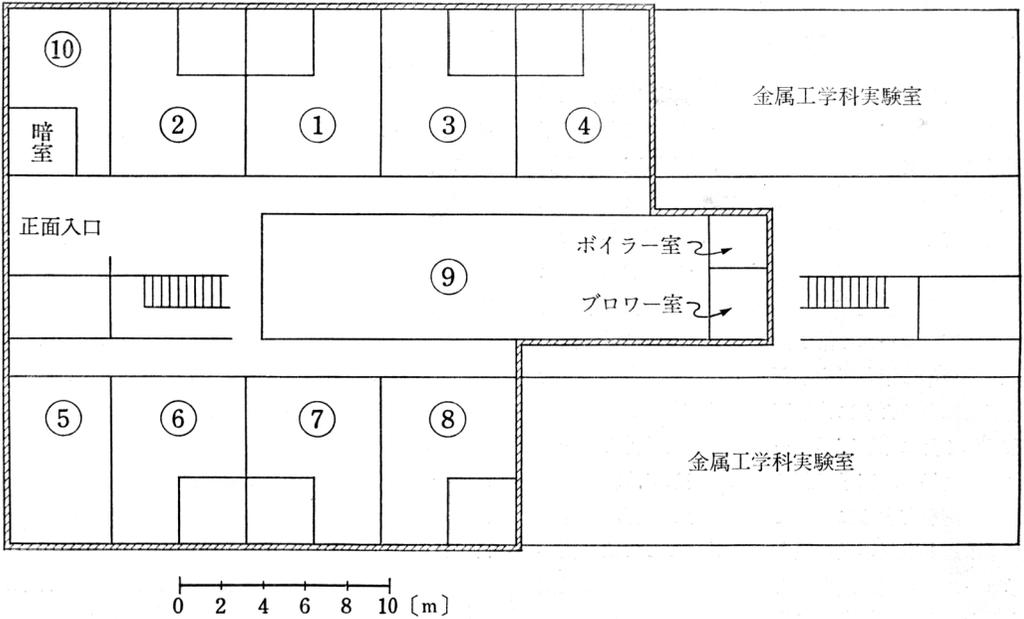


表 1

図番号	研究室・実験室名	広さ[m]×[m]=[m ²]	主なる設備
①	石川研究室	6.4×8.0=51.2	超音波発生装置, 粉体物性測定装置, 接触熱分解反応装置
②	城塚研究室	〃 〃	図書・資料
③	単位操作実験室	〃 〃	分級脚付品折装置, 晶析基礎物性測定装置
④	輸送現象実験室	〃 〃	衝撃波管装置, 非ニュートン流体の熱・物質移動実験装置
⑤	粉体工学実験室	4.8×8.0=36.4	真空・加圧濾過装置, 高圧蒸解装置
⑥	動特性実験室	6.4×8.0=51.2	多孔板抽出塔動特性実験装置, 回転円板抽出塔
⑦	反応工学実験室	〃 〃	プラズマ・ジェット反応器, 冷焰反応器, 光酸化反応器, 流動放電炉
⑧	精密測定実験室	〃 〃	シュリーレン装置, BET吸着装置, 各種精密測定機器
⑨	特殊実験室	6.0×24.0=144.0	連続晶析パイロット・プラント, ボイラー, 実習用ガス吸収塔, 化学衝撃波管, 火焰分解型反応装置, 風洞
⑩	倉庫・暗室・工作室	4.8×8.0=36.4	

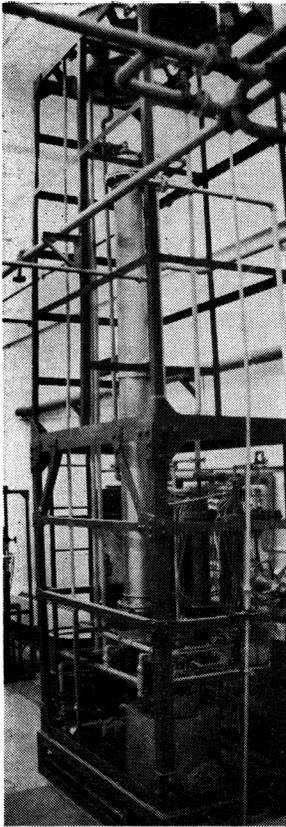
体抽出機構など

- (3) 晶析研究グループ（城塚, 豊倉, 岩本ら）……晶析基礎理論; 装置設計への応用; 新型連続晶析装置の開発など
- (4) 反応工学研究グループ（城塚, 平田, 村上, 趙, 佐野, 小坂田, 小池, 寺瀬, 酒井ら）……超高温反応; 燃焼反応; 液相酸化反応; 反応を伴なう諸操作; 熱分解反応触媒など

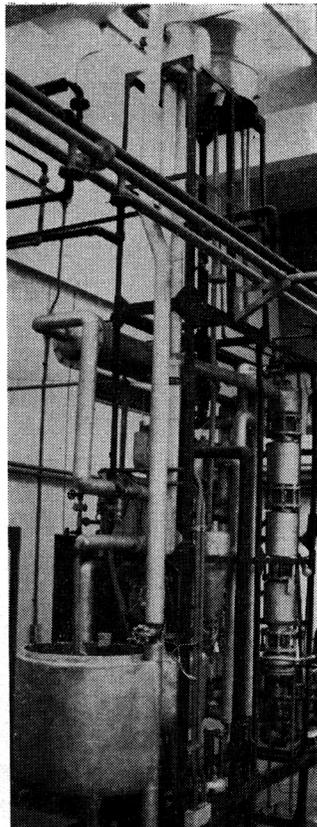
- (5) 動特性, 最適化研究グループ（石川, 城塚, 村上, 寺内ら）……化学プロセスの動特性; 最適設計; 最適制御など
- (6) 粉体工学研究グループ（石川, 田中ら）……膠質土の工業的利用; 濾過, 吸着分離; 粉体諸特性など

最近の著書および論文の一例

- (1) 城塚, 平田, 村上: “化学技術者のための移動速度



実習用ガス吸収塔



連続分級層型晶出装置
(パイロットプラント)



特殊実験室

論”, オーム社, 1966

平田：“超音速流中の移動現象(最近の化学工学, 1964年)”, 丸善, 1964

平田, 佐藤, 城塚：“圧縮性乱流境界層における円柱, 円管模型よりの物質移動”, 化学工学, **28**, 467 (1964)

(2) 城塚編：“抽出工学”, 日刊工業新聞社, 1964

城塚：“抽出装置の新しい設計法(化学機械技術,

第16集)”, 化学同人, 1964

城塚, 平田, 村上：“液滴・連続相流体間の物質移動速度について”, 第4回総合シンポジウム, 講演前刷集, 70頁(1965)

(3) 豊倉：“晶析装置の設計法について(最近の化学工学, 1965年)”, 丸善, 1965

城塚, 豊倉, 関谷：“連続分級層型晶析装置(Krystal-Oslo型)の設計法”, 化学工学, **29**, 694 (1965); **30**, 359 (1966)

城塚, 豊倉, 杉山：“連続完全混合槽型晶析装置(攪拌槽型)の設計法”, 化学工学, **30**, No8 (1966)

(4) 城塚, 趙：“プラズマ・ジェット反応器による炭素-水素系の反応”, ケミカル・エンジニアリング, **10**, 919 (1965)

城塚, 趙, 佐野：“流通型反応器におけるプロパン冷炎反応の特性”, 工業化学雑誌, **68**, 121 (1965)

城塚, 佐野：“層流境界層における非瞬間1次反応の解析”, 早大理工研所報, 掲載予定(1966)

(5) 城塚, 村上：“多孔板抽出塔の混合特性”, 同上, 第26輯, 63(1964); 第32輯, 92(1965)

城塚, 村上, 平中：“累相系十字流接触段の組成変動に関する動特性の理論的解析”, 同上, 第27輯, 50 (1964)

城塚, 村上：“多孔板抽出塔の過渡応答について”, 化学工学, **30**, No. 8 (1966)

(6) 石川編：“化学工学設計演習”, オーム社(1964)

田中：“窯炉および炉材保温材”, 技報堂(1965)

石川, 田中：“Gas Adsorption Characteristics of Japanese Colloidal Earth”, 早大理工研所報, No. 31, 32 (1965)

田中：“膠質土の表面特性について”, 粘土科学, **5**, No. 1, 2 (1966)

学界活動： 研究成果の多くは, 化学工学協会, 日本化学会などの学会に発表している。昭和41年4月に中央大学で行なわれた化学工学協会第31年会には物質移動論3件, 拡散操作2件, 伝熱1件, 反応速度2件, 動特性および制御1件の計9件, また慶応大学で行なわれた日本化学会には化学工学部門を含めて計5件の

研究が発表された。論文として学会誌に掲載されたものも非常に多くあり、そのうちの著書および論文の一例としては上に示した通りである。

さらに研究スタッフの幾人かは化学工学の分野の最も重要な学会である化学工学協会の多くの役員をしている。石川平七教授はかなり旧くから多くの役員をされ、現在では、例えば、城塚正教授は理事、編集副委員長、評議員、教育委員、研究調査委員などを兼任し、その他、化学工学誌査読委員に平田彰が、関東支部幹事として、平田彰、豊倉賢が分担している。

対外活動： これらの研究を通じて、工業界からの委託研究も少なくない。その成果の一つとしては、昭和40年度末に完了した新型連続晶析装置の開発があり、これに関連した研究には文部省試験研究費も交付されている。その他、米国の会社からも基礎研究の research fund として41年度100万円の契約がなされた研究もある。

3. 教育活動

学部： 昭和38年度に第3学年生から化学工学コースが設置された当初は定員20名から出発したが、現在では40名の定員を有している。

学生実験、卒業論文実験は10号館の化学工学実験室で実施され、講義には2～4号館が当てられ、視聴覚教室の7号館が使用されることもある。教科課程としては有機、無機、物理化学などの基礎化学の学科目の他に種々の工業化学の学科目を修得した上で、専門の化学工学における各種の学科目を修得することになっている。これらの化学工学の専門の学科目としては次の通りである。

第2年度生：化学工学A，B

第3年度生：化学工学実験I，反応工学，応用数学，単位操作I，II，輸送現象論，プロセス制御，プロセス設計，装置構造設計製図，化学機械，工業材料など

第4年度生：化学工学実験II，高圧及真空技術，自動制御，計測工学，材料力学，機械工学卒業論文など

これらの講義には、当早稲田大学の教員のほか、他大学、研究所、会社の一流の方々が講師として講義されている。これらの方として

理化学研究所	井上一郎
日本揮発油(株)取締役	高木智雄
東京理科大学教授	幡野佐一
千代田化工建設(株)取締役	溝口憲治

の諸先生がそれぞれ御専門を担当されている。

大学院： 化学工学専修の大学院修士課程，博士課

程は化学工学コースの設置に先立ち、昭和33年に設置された。ここではプロセスの企画計画の能力とより高度な研究能力の育成を目的として、現在、博士課程4名、修士課程15名が学んでいる。専門講義としては輸送現象特論，単位操作特論，粉体工学特論，プロセス・ダイナミックス，文献研究の他に、理工系大学院に設置された全ての学科目を自由に選択できるシステムになっており、これらには例えば、高分子化学，有機合成化学，燃料化学，無機化学，電気化学，醗酵化学，函数論，ラプラス変換，数値解析，流体工学，伝熱工学，自動制御，プラント・ダイナミックスなどがある。

この他、ゼミナールも活発に開かれ、会社の中堅技術者や他大学の先生方の特別講義を始めとして、研究グループゼミナール，大学院ゼミナール，学部ゼミナールなどが毎週2回以上行なわれている。

4. 卒業生の活動状況

大学院では、昭和40年度末現在ですでに、工学博士2名，工学修士15名を社会に送り出しており、これらの人達は、大学，研究所，生産会社，外国留学など、夫々の方面で活躍している。

学部の卒業生も化学工学コースとしてはこれで2年目を迎え、大学院進学12名，エンジニアリング会社9名，石油・石油化学関係6名，肥料関係3名，繊維関係3名，その他の会社8名がそれぞれ進学，就職している。

また、化学工学コース設置以前にも、化学工学を専修した人が多勢おり、現在総数300名位にものぼり、工業界のあらゆる分野で活躍している。

以上、極めて概要を紹介したにとどまるが、日本産業の重化学化，化学工業の高度技術化の急務である現在、さらにわれわれ化学工学コースの充実を願って、スタッフの全員が努力する心算でありますので、何分の御後援を切にお願いする次第であります。

会員の声

応化会についての一つの所感

日本石油精製 牧 親 彦

この応化会だよりの第1号に浅野スレートの荒木さん(旧, 第7回)が海外旅行の途次, 同窓の人々からその好意を通じて受けられた印象の一端を述べて, 応化会は学術の研究切磋琢磨の場以外に, 交友親睦の場として大きな意義があることを痛感したと書いておられる。

筆者も応化会の在り方に関する, このような考え方について全く同感である。

社会生活は何らかの形態での集団を基盤として成り立っている。良きにせよ, 悪しきにせよ, 社会というものがある以上, 社会そのものの動きも分化された小集団の幾つかの構成の中から生れて来ることも不思議ではない。

現代の若い人々が社会人となってから, 母校に対してもつ感覚が, われわれの時代のそれと同じであるか, 違ったものであるかは私には判らない。大学を卒業したからには自分の力を信じ, その力に頼って独立独歩, やがて将来の大をなす自信と気概を決して悪いと言うのではない。しかし, 荒木さんが感じられたような, 同じ学窓を出たればこそ人間相互の温い親切とか, 心くばりというものが, 如何に人生行路の上に貴重なものであるかということも, 同時に知って置かねばなるまい。人生というジャングルに深く分け入れば入るほど自分の力の及ぶ限界が如何に小さく狭いものかを知るであろう。このような場合, 校友の他意なき助言, 知識交換, 心くばり, などが人生の道標として, 他からは得られぬ何物かを与えてくれると私は思っている。そして, 私はこのような見地から校友会, あるいは応化会の存在の意義を評価したいのである。応化会が学問を主体として, その權威を世に問うことも結構なこととは思うけれども, むしろそのような目的のためには, それぞれの専門の学会の研究発表の機会を有効に利用した方が賢明である。

処世の第一歩は自己の存在を他に認識させることである。それは人と人との意識的な接触から始まる。

接触によってわれわれは相手から何物かを獲得し, 同時に社会集団の中における自己の存在を示すことが可能となる。社会生活をする以上, これは不可欠の要件であり, さもなければどんな有能な人でも地中の砂

と異らぬことになってしまう。

マスプロ教育の弊が昨今, 世の話題を呼んでいるが, われわれ同窓の学友が大学とは勿論のこと, 互に血の通った親密さを保ちながら, 激甚な生存競争の場に処する上に, なにがしかの相互利益が友情の働きの中から生れて来て, 人生に役立つことが出来れば都の西北の声価も一層高まるであろう。

私もこのような場として応化会が発展してゆくことを望んでいる一人である。

新卒業生送別会に出席して

日本化学工業 棚 橋 幹 一

昨年応用化学会の役員が改選され新会長に電気化学の水野さんが御就任になると同時に, はからずも副会長の大任を仰せつかったので, 会長を助けて会の運営のためにいささか微力を尽す覚悟ですから, 会員の皆様の御指導と御鞭撻をお願い致します。

さて今回の早稲田大学の紛争は, マスコミの報道によって社会的にも大きな問題となって居りますが, この不幸な事態は私共卒業生としても誠に遺憾に堪えず, 一日も早く解決する様心から念願している次第であります。

其処で今年は大学の卒業式も早大80余年の歴史上曾てない事態となり, 統一卒業式が出来なくなったのであります。応用化学科に於ても旧応化教室に於て, 総長の祝辞もなく誠にささやかな卒業式が行なわれたわけであります。

以上の様な状況の下で新しく卒業される84名の卒業生諸君も例年と異り甚だ淋しい卒業式だから先輩の方々が一人でも多く送別会に出席して激励してもらいたいという教室側の依頼に応じて, 私としては昭和12年卒業以来始めて出席したわけであります。

長い間の学生生活を終つて, 新しく社会の第一線に出られる新卒業生諸君の中には勿論更に修士課程に進まれる人も多いと思いますが, 経済界の不況の折柄大学卒の新規採用も此処数年来の人手不足の時代とは全く状況が違って居るわけですが, 兎に角, 応化の新卒業生は既に全部就職先も決つて居る様で, 其点は他の学部の新卒業生よりは非常に恵まれて居ると思います。

卒業式に引き続いて行われた応化会主催のささやかな送別ビール・パーティに於て, 水野会長を始めとして私共先輩や先生方の卒業生を送り, 或は迎える, 非常に心のこもった祝詞があり, 卒業生からも感謝の言葉がのべられて誠になごやかな雰囲気の中で会が進められ, 今回の学園の紛争など何か他の学校の出来事の

様な錯覚を感じる程でありました。この様に応化の学生と教室並びに卒業生が縦横の非常に固いきづなで結ばれている事は、最近の様に種々の方面で非常に混乱した時代に於て益々其眞価を發揮す可き時だと痛切に感じた次第であります。

新卒業生を迎えてわが応化会も産業界の各分野に於て大いに発展する事を期待し、更にこの会を通じて業界と教室側が一体となって互に協力して、所謂産学協同の実を大いに上げたいと考えて居ります。それに依って当応化会もその社会的意義と使命が益々大きくなって行く事と考えます。

今年度の応化会新卒業生送別会にのぞんで、私の感じました事の一部を述べると同時に、応化会の運営の安定化と更に将来の発展を希望して筆を置きます。

偶 感

秩父セメント 大友 恒 夫

先日、日曜日に珍らしく戸棚の整理をしていた処、別掲のような寄せ書が出て来たので、つい整理の手を止め、しばしこれを眺めつつ思い出にふけたのであった。これは思い出すまでもなく今を去る27年前われわれが第19期生として卒業した時、当時の小林研究室に配属され卒業論文の御指導をうけたここに署名した面々の寄せ書である。この時の会の光景は既に遠く忘却の彼方であってどうしても思いたすことは出来ない様である。そして又この会をやった「未広」というのがどこにあったか鳥屋か肉屋には違いないと思われるがこれもまた残念ながら覚えていない。

しかしながら当時の小林久平先生は未だに眼前を髣髴として去らないのである。当時先生は未だお元気ではあったが、お眼が大分悪くなられたご様子であり、且つ大変御多忙であられる様であったが、そのお悪い眼で研究室にあっては常に机に向われ、まるで書物をなめる様にして読んでおられるか、そうでなければ大

きな字で論文の原稿を書いておられるのであった。相当な悪童であったわれわれも先生には心から敬服し、また全く頭が上がないのであった。村井先生は御卒業後東大応用化学科にて研究され、前年早稲田に帰られ小林研究室に講師として来られ、われわれは御指導をうけた最初の学生であった。当時の村井先生は今日の先生と全く変わらないといってよい。いや今日の先生は当時の先生とその若さといい、ファイトといい、全く変わっておられない。その勢いでわれわれもしごかれたのであったが、今日学園多事多難の時、先生の御健康を祈って止まない次第である。

残りの面々について語るべき紙数も尽きた様であるが、皆元気で何とかやっている中に只一人石本君は満鉄(?)に就職され、私は昭和14年に同地に旅行した際会ったのを最後に不幸戦死された。われわれのクラスの中で3人の戦死者のうちの1人である。

最後に冒頭掲げた寄せ書の上の方を見て頂きたい。そこにかかれた「活動」これは小林先生の筆である。恐らくこれは先生のモットーであり、又、新卒業生への饒の言葉であったに違いない。今日われわれは社会の種々な方面に於いてそれぞれ活動して、先生の御期待の何分の一かを果しているといっても過言ではないと思われる。しかしながら今日の早稲田応用化学会が、この言葉にふさわしい状態かどうかを考えてみると、心の中いささか忸怩たるを覚える。先輩諸兄、後輩諸氏 どうかこの小林先生の言葉を時々思いだして母校への思いを新たにして頂きたいことを委員の一人として御願ひする次第である。

最近の随想

共立薬科大 柏木 希 介
ミツツ石輪

昨年、考えるところがあって技術士の国家試験を受けた。我国では技術士の制度は国家が認定したものであるが、それ程は普及していない向もあって、会員の中にはそれぞれ何であるか御存知のない方もいられると思う。技術士法によると、登録をうけて科学技術に関する高等の専門的応用能力を必要とする事項についての業務を行う者である。つまり技術を売る者である。資格としては研究室経験では駄目で(応用理学を除く)大学卒業後、現場経験10年が基準である。ベテランの技術士は皆相当の年輩の方許りで一種の自由業であるから坐っていは仕事は来ないし、又、自身一種の経営者であって、何もかも自分でしなければならぬ。大会社にあっては組織の中で試験依頼をし、部下に仕事をやらせて事務組織を使っとうまくやれば良い

ので、何でも割合にうまく行くしその反面、自分の本当の能力はそれ程なくとも政治力のファクターが大きい。そこに実務の上で技術士の仕事と相違があるし独立した技術の難しさがある。外国では一流のコンサルタントは非常に高い地位にあるとも聞いた。

いま独立と言ったが一匹狼では駄目で、各方面に広い面識と信用がないと仕事が充分にできないことは確かである。私も幸いベテランの或る技術士の方と一緒に米国農商務省依頼の調査をやっているが、実際にやってみると仲々難かしい面が多く、技術者としても反省させられ良い経験になったと思っている。

もう一つ最近感じていることは私が応用化学科の学生であった昭和23年頃は終戦後未だ余り経っていないために資材が不足で充分に実験が出来ない時代であった。又その後、時々学校を訪れたりして学生の数が多過ぎてどう仕様もない印象を受けたりした。官立大学の研究室にも時々行く機会があって学生数の少ないのが実に羨しかったのであったが、自分で教えてみて色々なことが分った。私は今或る薬科大学で物理化学の講座を持っているが、一学年150名以上いる。これは主に経済的理由であるらしい。一方会社の研究所でも多くの大学卒の研究者と仕事をしたりしたが、若い社員に聞いてみると私立大学では何処でも学生数は大変なものらしいし、早稲田や慶応のような古い有名校の外は相当数の学生の卒業実験を学外の機関に依頼して行っている処も少くない。それらの条件の下に学問の分野で業績をあげることの難しさも良く分ったのである。つまり総合して考えてみると、我田引水ではないが早稲田の応用化学は実に立派な業績と質の良い学生を持っているということができ、秘かに誇りに思っている次第である。但し科学の研究には色々な情報連絡が重要であることから、もっと学外の研究者、東大であれ、会社の研究所であれ、接触して付き合うことが必要ではないかと思うのである。以上誠に生意気なことを書いてお叱りを受けるのではないかと恐れているが、ペンの走りとしてお許しを頂きたい。

マレーシア国立ゴム研究所を訪れて

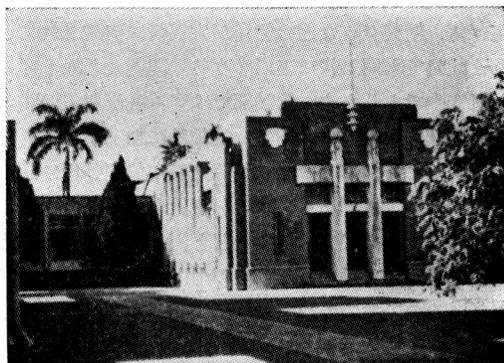
早大理工学部
化学分析実験室 猿井喜一郎

1964年春、学生5名を連れ東南アジアの調査旅行をし、その折マレーシアの国立ゴム研究所を見学した結果について簡単にお知らせ致します。当時でもマレーシアとインドネシアは戦争状態でシンガポールからジャカルタに行くことが出来ずバンコック、シンガポール間を国際列車での往復を余儀なくさせられました。

吾々の乗った列車は特急で主要駅にのみに停車するのがたてまえなのに、平原の真中で急停車するので何事ならんと列車の前方を見ると、2~300頭の牛の行列が鉄道を横断して居り、牛の横断が優先のようで気長に通過を待つて後に動き出すといったのどかな風景に二度程遭遇致しました。マレーシア領内を南下するとアロースター、ベナン島、イボを経てクアラランプールに到着致しますが、鉄道沿線一帯ゴム林に囲まれて居りその緑の強さは到底東京周辺では見られない強烈なものです。

マレーシアは日本の約1/5の面積を有し、その人口は約680万人で言葉はマレー語が国語であり、その外英語、中国語、タミール語などが使われて居り、宗教は回教、仏教、ヒンズー教、キリスト教などであります。何しろ高温、多湿、多雨量で殆ど四季は認められない典型的な熱帯地であることはご承知の通りであります。

マレーシア経済は何んと云っても農業が中心で、現在では土地の開拓、かんがい、農業生産面での研究が課題になって居ります。マレーシア農業ではゴムが大きな比重を占めて居り、ゴムの輸出は伸びてはいるが世界的に合成ゴムが生産され、これがために国際価格の値下りで国民所得はふえていないのが現状であります。この国にゴムの木(パラゴムの木)が初めて植付けられたのは1877年であり、ヘンリー卿が1876年にブラジルからゴムの木の種子をもたらし、その翌年セイロン、マレーシア、ジャワその他の地域に植付けられたのは余りにも有名な話であります。19世紀の終頃迄農場栽培は殆どされず、1897年まではゴム作付面積は350エーカーだったが、1914年に100万エーカーに、現在では350万エーカーに達している。クアラランプールのアンパング通りにある国立ゴム研究所は、1925年に設立されゴム生産を凡ゆる面で研究しその成果を関係方面に提供するために設立され、その研究費はマレ



国立ゴム研究所正面

ーシヤのゴム輸出の特別税並にナイジェリア、サラワク、ブルネイ、北ボルネオなどのゴム生産地からの寄付によって賄われています。研究所の組織は71名の主として英国系の上級職員と468名の中国系を含む現地人の下級職員とで組織されて居り、この外にクアラランブールから16マイルのサンゲイブロウにある試験所は広さが3,000エーカーあり、5名の上級職員と49名の下級職員と444名の労務者を擁しています。

この様な組織をもってゴムの木の栽培、ゴムの収穫の凡ゆる面を、土壌、植物、病理の三部門で研究を実施し、ゴムの商品への転換研究は化学部で担当している。前記三部門についても詳細に述べたいが、紙面の都合でここでは化学部について述べることに致します。

化学部では先づ第一に樹液から得られた沢山の産物の処理を行って居り、その中には煙製薄板、クレープ、特製ゴム、樹液濃縮物等が含まれて居ります。化学部の主要な仕事は生産コストを下げ、工業的消費の天然ゴムの質と有用性を高めるための研究開発とエステートや工場へのアドバイスと試験サービスをやり、最近ではゴム製造業者に迄それが広められています。研究活動は広い分野に亘って実施されて居り、例えば生化学の分野では幾つかの非ゴム成分の研究が英国ウェルウインのゴム生産研究協会との協力のもとに企画実施されて居り、樹液や樹液濃縮物の微生物学的研究が続けられている。この様な実験室は試験場にも併設されて居ります。コロイドやポリマーの分析研究。樹液の粒子とその凝固に関する作用の研究、取りたてのラバーの反応性と炭化水素の研究、季節や環境の影響、植付材料の研究等、広範囲に行われており、之等の研究成果は特許などの形で現れその特許はマレーシヤその他の地域の栽培者や製造業者に自由に提供されて居ります。又化学工学的研究のセクションでは凝固物の乾燥、検査等が特製トンネルドライヤーの中で行われて居り、更に天然ゴムからの新しい産物、例えば優良加工ゴム、精製ゴムなどの開発が大規模に実施されて居り、此処でも同じ様に工場廃水処理問題など取上げられ研究中であります。化学部ではゴム乳液収集の問題から乳液を薄板、クレープ、濃縮物に加工する工場設計に至るまで指導し、ゴム関係全般の依頼分析、品質統一テスト、スクラップゴム関税見本検査等もやっているのは日本の工業試験所などと同じであります。特に新しい問題と思われたものの中に透明ゴム製品等があり、その添加物に超微粒子のSiO₂などを使用しているのが注目されました。

一般にゴム園では品種の改良された種子を蒔き、苗

木を育成して植付け大約15年するとゴムの木が老化して来て樹液の産出量が少なくなるため切り倒し、新しい苗に植換えるため、之が管理運営にも大きな資本が必要とされて居り、従ってゴム園の持主は英国系の人か又は中国系の人が多く、現地人のそれは非常に少いのが現状の様であります。

東南ア學術調査隊を編成するのに当り、応化先輩各位から物心両面におけるご援助を賜りましたことを誌上をおかりしてあらためて厚く御礼申上ます。

新幹線にのりながら

東洋電機製造 田中 照浩

戦時中の弾丸列車の構想が、オリンピックを契機として、強引に新幹線に結実した。技術的に検討を要する点を幾つかもちながら、それらは敷設工事と平行して処理されていった様に見える。50年近く電車を作り続けている私の会社は、新幹線のために努力もしたし恩恵にも浴している。

電車屋さんはその企業形態より見て、飛行機屋さんと自動屋さんの中に位置する。スケール、ニュアンスは違うが、どれも人命を預かり、かつ停止させるのに苦勞する。但し運営面では、自分が動かなくなると他の列車も止めてしまう点は、他の二つと違っている。同じ地域を沢山の線が走るのも、一種の社会的 redundancy の意味もあるのだろう。通勤地獄を見ると、それどころでは無いが。

通勤電車と新幹線を比較すると、前者はすしづめの状態で、パッと走り出してはすぐ止まらなければならない。後者は殆んど惰性で走りまくり、与えられる条件は二、三違った所もあるが、モーターとしては前者に比し、ずっと楽な方である。同じ距離を走るにしても、新幹線は早いだけ台数が小さく、鉄道のエリート的存在である。

化学を専攻して、電機メーカーに入った私は、主として絶縁物の仕事をしている。絶縁の役割りはさておき、モーターは15年前と比べると、随分と小さくなった。材料もセラックなどの天然樹脂から、ポリエステル、エポキシ、シリコン、弗素樹脂、ジフェニル・エーテル、P.P.O. ポリアミド、ポリイミド、合成ゴム……と甚だ巾広く、とびこんでくる。この所、我国の工業水準が海外でも高く評価され出したのか、欧米での試作品が空輸されてくることもある。電機会社にいる方が、材料メーカーの人々より見聞が広がる。どうも最近は一般的にユーザー側知識が豊かになる傾向があり、それだけ利潤があげ難くなりつつある様

だ。メーカーは市場を適確に知り、ユーザーを感心させてこそ、収益率増大が期待できると思う。

仕事でよく新幹線を利用するが、その時間は大いアルコールを含みながら懐旧にふけている。私達が学生時代使った機器類と、今私の周囲にあるものを比較すると隔世の感がある。昔、一生懸命ノートしたのは、化学史の様なものになってしまった。操作手段さえ会得すれば、それで済む様な錯覚に陥り勝ちな毎日。高次元に機能化された現代で、最も怖いのは人間の神経の乱れであろう。新幹線もそうだが、人命を預る高度の機械に接すると、いつも精神異常が気になり出す。これにはほとんど私に見当のつかない世界だ。

見当のつかない事と云えば自分の事が一番かも知れない。学生の頃、硫酸工場でむせたり、製紙工場で大きなマスの流れを見たり、一体自分はどんな仕事をするのだろうか？ 試験の厳しい年だっただけに、職種希望どころでは無かった。そんな風潮で、ただでさえグループ性があって一風変っていた、と云われる、私達のクラスは連帯感、親密感を深め、よくまあ勉強はともかくとして、学校に集まったものだ。未だにそのくせが抜けず、何かと云うと集まる。共通な、或いはまた独自の体験を語りながら、愉快な一ときを担任だった篠原教授、級友宇佐美助教授を軸に、いつもくりひろげるのである。第2号「応化会だより」が出る頃は、早稲田の森も、経済界も、清新な息吹きをあげて前進しているに違いない。

応化生のページ

—— 新卒業生の声 ——

君、自覚せよ

池野 国男

去る3月25日、早稲田大学始まって以来初めてと云う、卒業式のない卒業をして我々は社会へ巣立って行った。そして学生々活に慣れた小生にとっては、辛い毎日が続いている。職場、サークル等の自己紹介で、「早大です」と云うと決って、「早稲田は大変ですネ、いったいどうなるのですか」と聞かれる。在学中は卒論の忙がしさにまかせて、積極的に考え、活動しなかった小生にとって、恥かしい事だが答えに窮する事も少なくない。

その時初めて今回の紛争を第三者的な目で見ると、「学生一人一人の自覚の不足」と云う事に尽きると思う。本質的な問題の批判は別として、君達一人一人

が、はっきりとした自分の意見を持たな過ぎる。君は「いや、持っています」と云うかも知れない。しかし今はそれを表明できないのでは、持っていないのと同じ事なのだ。組織的な背景を持たない君が、自分の意見を表明したり、行動を起こす事の困難さは十分にわかっているつもりだ。しかしその機会は皆無ではない。それにもかかわらず、そのわずかな機会を君は自ら放棄している事が、多いとは思わないだろうか。今は単に君の考えを君の心の中で、空転させているだけでは、何もならないのだ。あくまでも試験、授業をボイコットするなら、するでいいだろう。なぜデモに数百人の学生しか参加していないのだ。又ストに反対なら反対でいい。なぜ数百人の学生に牛耳られているのだ。

君は単に、「当らず触れず」の処世術を身に付けるために、早稲田の門をたたいたのか。善しにつけ悪しきにつけ、君が自分の意見を自分だけの責任において表明できるのは、学生時代だけであろう。その貴重な機会を、自ら放棄する様な事が決してないように。ホヤホヤの先輩として、自らを省みる事なく苦言を呈する次第である。

社会は我々に、学生時代の様に自由な思索の場も、時間も与えてはくれない。だからこそはっきりとした自覚を持たなくてはならなくなるのだ。再度云おう、「君、自覚せよ」さもなしと君は単なる機械の番人になってしまうのだ。

(加藤研, 現在 共同印刷勤務)

雑 感

君 塚 洋 司

“仙台工場勤務を命ずる”の辞令の下に、森の都仙台へ赴任し、回顧の情で筆をとっています。

武富・宇佐美研を出て会社に入った私にとって、卒論そのものよりも、武富・宇佐美研の卒業生であることをうれしく思う。会社の先輩の多くが、同研究室である所以である。

学生時代、そして入社しての雑感を二、三述べることにする。試験課に配属され、各種分析、年一回のシンポジュームの研究が主たる仕事らしい。私の悩みの一つに文献がある。英文はいうに及ばず、独文に迄必須である。文献を読む習慣が要求される。麦酒関係は、特に独文が要求され、卒論では邦文ばかりくっていた為、これから大変です。学生時代、一年より、二、三冊 text として、英文物を与えられますので、軽視する(訳本に頼る)ことなく、じっくりと読んでほしい

と思います。

次に、長期化した学園ストで、大いに認識の高まった問題意識の概念を、常に持つべきと考える。全てものには理念があると思う。

理念追求の態度が、私達に要求されていると考える。それには、的確なる判断力と、身に備わった自信、つまり信念が存在しねばならない。信念を持って、社会へ出る前段階として、早大の精神たる“進取の精神、学の独立”を根底に進んでほしいし、学園ストという貴重な体験より、“現世を忘れぬ久遠の理想”の下に、正しい現状分析をし、理想追求の念をもってほしいと思う。

最後に、在学二年秋季迄、六大学野球で不振を続けていた早大が、三年春季、メンバーは殆んど不動にも拘らず、監督が変わったのみで優勝をした。この事実は、私にとって、内在エネルギーを如何に出すべきか、又、内在エネルギーの偉大さを教えてくれた。後輩諸君の莫大なる内在エネルギーを（前述の信念を持って）全て発揮するようがんばって下さい。

一言、“人多き人の中にも人ぞなき人となれ人、人となせ人”

（武富・宇佐美研，現在 麒麟麦酒勤務）

卒論の思い出

斉藤昌弘

私が山本・森田研究室で卒論研究を行うことにしたのは、さして深い考えからではなく、石油化学にほんの少し興味をもっていただけにすぎない。この卒論研究の間に感じたことを断片的ですが、書こうと思います。

卒論研究に入るまでの3年半は、ただ講義をうけたり、教科書どおり実験をしたりするだけで、あくまで受動的であったが、卒論では自分から積極的に動かなければならなかったし、研究の経験もなく、それにこの研究室は触媒を主体にした反応をあつかっており、研究の方法や結果の解析など、非常にわかりにくい点が多く、卒論の頭初はただとまどうばかりであった。幸い、この研究室は各テーマ毎に大学院の先輩と組んで研究するので、わからない点や研究の計画等について、先輩と気軽に話し合うことができ、おかげで非常に助かったし、楽しく研究することができた。

先輩との話しでは先輩からよく「オリジナリティを発揮してやろう」といわれたし、また実験データを先輩とディスカッションする時は必ず先輩から「なぜ、どうして？」と質問された。けれど「……」といつで

も返答につまってしまう。そこで自分が不勉強だなあとつくづく感じてしまった。

こんなことをいっては大きすぎだが、今日までの社会の進歩、発展は人間のより良い社会にしようとする欲求と、それから生ずる創造によってもたらされたものであろう。即ち研究でも何でも、物事は創造によって進歩する。それゆえ創造的人間が現代の人間社会で強く要求されるであろう。

それではオリジナリティはどうして生まれるのか。それは簡単に言えば「なぜ、どうして？」という物事に対する疑問からではないかと思う。しかし「なぜ、どうして？」という疑問詞は自然に口に出てこない。この不思議さを感じる能力は、いろいろの知識、物事をよく見るという態度によって養われるのではないかと思う。

こんなことはあたりまえのことと思われるだろうし、私も今まで概念的にはわかっているつもりであったが、実際に卒論研究を行ってみるとオリジナリティが非常に大切なものだということが強く感ぜられた。卒論とはその研究結果の良し悪しよりむしろ、研究方法、態度等を学ぶことに意義があるのではないかと思う。

（山本・森田研，現在 早大応化大学院在学）

くだらない話

野本暢夫

俺はいつの頃からか、落語に興味を持つ様になった。はじめは、ただ何となく、ひまつぶしに聞いていたのだと思うが、次第にそのおもしろさにひかれ、多くの話を聞いているうちに、色々と学ぶべき事があることに気がついた。

落語というものは不思議なもので、話の締めくくりともいうべき“オチ”がわかっているのに、自然に引き込まれてしまい、話の終わった後に、何とも言えない、まるで初めてその話を聞いた時の様な、ある余韻が残る。これが何とも言えずすばらしい。

この余韻に引かれて落語を聞いているうちに、落語というものが、人間関係の円滑な回転に必要な“何か”を持っている様な気がして来た。

一つの話の中にも、様々な人間が登場し、これらの人々は、表面には現われない微妙な味を持っている。そして彼等は奇抜なアイデア、ユーモラスな行動の中に、ほのぼのとしたある調和を見せてくれる。落語を聞いていけば、知らず知らずのうちに、これら登場人物の味を見ぬき、自然とその人柄から“何か”を学び

取ると思う。この“何か”は、はっきりしないが、少なくとも人間の厚みを増し、交際の秘訣にヒントを与える助けとなるだろう。従って落語というものは、おもしろく聞いているながら、人間修養の面に、大きな効果を与えてくれる、非常に結構なものだと思う。

笑いある生活、余情ある交際は、人生を愉快にすると共に、我々が大切にしなければならぬ事の一つだと思う。

(吉田研, 現在 早大応化大学院在学)

早稲田にはいつて感じたこと

萬 晋

大学1年の春の早慶戦の時に応援をしていて“早稲田！ 早稲田！”と叫んでいる時に始めて俺も早稲田に入ったのだという実感がしみじみとわいて来てから、レポートに追いまくられ、試験にうちひしがれ、早稲田祭の仕事をやり、ある時は喜び又ある時は悲しみ、授業料値上げ問題のため全体の卒業式をやれず応化だけの卒業式を地下の教室で行い、卒業するまでの期間は振り返ってみると非常に長いようにも、又非常に短いようにも感じられます。

早稲田祭の応化展の委員をやった3年の時“染料顔料”というテーマで各パートに別れて研究をしていた。展示する段になって各パートの展示順序の事で少し行違いがあリトラブルが起った。高校時代までは洗々ながらもついて来ると言うケースがほとんどであったのに、ふだんはおとなしそうな人が強硬に抗議し、自分がなっとくするまで妥協しないのである。この時、さすがに応化生だけあって皆自我と確信というものを持っていると感じ、この応化生というグループに誇りを感じたのをおぼえています。

応化に入って誇りを感じた事、喜びを感じた事は数限りなくあったけれども同時に失望した事もあった。私自身言える義理ではないのですが、非常に小さくまとまりすぎてこせこせした人の多かった事、過程ではなく結果にのみこだわる人が多かった事、各自が自我というのを認識しているながら依頼心が強く、野を一人行く早稲田精神というのが欠けているように思えたし、又個人の問題ではあると思うのだが、大学というものが専門教育の場であり、人格形式に対し考慮していないという印象をうけたのは残念であった。私自身の場合、自己満足にすぎないかもしれないが成績は良くはなかったけれども、良くはないなりに努力し、他の面で敗けないよう努力したのだという満足感を持ち応化の学生生活というのを振り返ってみて非常に有意

義であったと思う。

(大坪研, 現在 セネラル物産勤務)

ニュース

山口先生、停年ご退職

応用化学科の第1回の卒業生であり、また40年の長きにわたり当教室にあって学生の訓育指導に御尽力下さった山口栄一教授には本年3月をもって停年にて御退職になりました。先生はこの2、3年間病をえられ療養につとめておられますが、最近はいよいよ元気を回復されお好きな読書に毎日をすごしておられます。

応用化学会では先生の教室にたいする長年の御功勞に感謝するために記念品を贈呈いたしたいと計画を進めております。近日中にその趣意書が皆様の御手許にとどくと思いますが、是非御賛同下さいませようお願い致します。(宮崎智雄記)

山本先生、教育功勞者として表彰さる

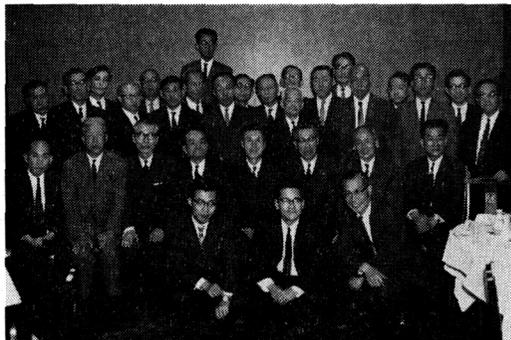
応用化学科 山本研一教授は昨年11月10日、産業教育80周年記念 教育功勞者として文部大臣より表彰されました。(宇佐美昭次記)

応用化学会関西支部の近況

編集係より関西支部の近況を報告せよとの御要求をうけまして、実のところ少々とまどっております。

第1回の卒業であられる上田武敏先輩に会長をお願いして、早校友会の名のもとに、同窓の有志が年に1回宛ぐらい集り一夕を過すようになってから、随分年数も経ちました。最近では39、40、41年と3～4月頃に、お互いに元気な顔を見せ合っております。

昨年は大阪で日本化学会の年会が開かれました機会に、来阪された諸先生方(武富、山本、石川、大坪、



(今春の関西支部会記念写真)

吉田、篠原、森田、藤井、佐藤、宇佐美先生)をお招きして、4月3日にささやかな宴を設けることが出来たことは、近年にない楽しい行事でありました。

矢張り関西在住の我々としましては、諸先生方にお目にかかり、親しく教室の様態など伺えることは非常なよろこびであります。当夜も最後には学生時代に戻って“都の西北”を合唱したほどでした。

本年は去る4月3日に早桜会の催しをいたしましたところ、わざわざ吉田先生のお出でをいただきました。マスコミを賑わしている学園問題については、当然我々も深い関心をもって成行をみつめている訳ですが、吉田先生より詳細なお話があり、学生運動の背後にあるものについて認識を新たにすることのできたことは、当夜の何よりの収穫でありました。

つねづね、早桜会をより一層発展させたいものと念願しておりますが、集りがあまりよくありません。毎回120名ぐらいの方に御案内を出すのですが、お集り下さるのはいつも30~35名程で、特に若い同窓生の方々の出席が少いことが気になります。今回の集りの折、“年1回の集りでは少い、2回にせよ”、“若い人も集り易い会を開け”との御意見が多数出ておりました。これ迄何とはなしに我々(大阪有機化学：鎮目、中村、多田)の方で幹事役をお引受していたのですが、これからは若い会員の方にも御世話役を願って、なお一層の会の発展を目指して、会員間の親睦・交遊の度合いを深めてゆきたいと考えております。関西在住の方々はふるって御参加願いたく、正直なところ、現状ではいささか動脈硬化の嫌いがありますので、若返りに御協力下さるように誌上をかりてお願いいたします。(多田長定記)

◇ お尋ね ◇

次の会員諸氏の住所が不明です。連絡と完全な会員名簿の作成のために、消息をご存知の方がいましたら、当会までお知らせ下さるようお願い致します。

(旧：旧制，新：新制，燃：燃料化学，工：工経，大：大学院，数字は卒業回数)

(旧2)高橋泰吉，(旧3)遠藤多喜雄，岡崎金造，豊田重臣，(旧4)河辺 健，木村規郎，村本豊四郎，渡辺秀，(旧5)伊藤日出夫，石塚 諄，川津興仁，工藤義郎，鳥井淳治，藤本資雄，(旧6)斉藤繁雄，渡辺新十郎，(旧7)井上 清，花村重久，村上義比古，(旧9)御厨国男，(旧10)平田 薫，松本堯司，(旧11)石田兼吉，神津東吾，西村経太，参成辰雄，三村倫次郎(旧12)河野和夫，長行司清味，(旧13)呉 恩敏，呉 進

裕，佐久間一彦，周 清芬，長浜 弘，柳井漢相，(旧14)佐々木浩，島田国郎，(旧15)志村智夫，(旧16)大原源之助，(旧17)今村竹利，上条長一郎，(旧19)中野大輔，(旧20)御所讓吉，(旧22)平 正徳，(旧23)稲垣武彦，桑野善夫，斉藤英生，後藤忠夫，崎尾 要，服部豊二，樋口健二，(旧24)吉田 忍，吉田元徳，(旧25)天野弘昭，井上理基，中村四郎，原田鵬一，林 章，(旧26)岩田繁太郎，島森有礼美，(旧27)坂井弥，田島一徳，(旧28)内山 謙，唐住理照，葛山秋二，合田克巳，小池 淳，永井尚治，橋本彦太郎，梅敷光治，増井 讓，村瀬武男，(旧29)鈴木和友，(旧30)川口史郎，(旧31)桜井 孝，高橋誠一，(旧32)鎌倉 潔，北島治明，中谷治夫
(燃3)青木良市，岡本 弘，重田金弥，朽木 毅，平本郁夫，矢沢志朗，(燃4)新治吉雄，(燃5)伊藤秀雄，(燃6)斉藤克二，長沢寛一，安藤成一，井倉 叡，岸田 耕，(燃7)袴塚卓雄，本間 喬，安田定治，鈴木幹夫，牧野 将
(工7)佐藤憲雄，高橋 勤，仁賀保成行，野口義一，林 清士郎，松岡 巖，(工8)工藤寿一，久村欽一，鈴木信之，津田毅一，(工9)富永 孝，福田健二，(工12)岩田 明，長尾鉄中，寺尾 隆，(工13)小田切護
(大1)渡辺 昭，(大13)佐藤 興，佐藤四郎
(新1)伊藤公一，大逸静夫，小林昭夫，佐藤幹雄，西岡芳生，葉山 昇，吉川 忠，渡辺晴夫，(新2)佐藤和夫，林 達也，星川栄蔵，渡辺敏雄，(新3)安生謙二，山本智也，(新4)熊木三郎，笹野昇平，山田浩三，(新6)斉藤和彦，柚木栄一，(新8)石坂竜夫，(新9)阿武靖彦，山本晃司，趙 錫来，朱 宏典，佐藤 久，(新10)山口正則，(新11)江崎友康，(新12)北中静二，

編集後記 「応化会だより」は会員の親睦をはかることを目的として、学内の活動、卒業生の意見、消息および情報の交換、また学生会員の意見等々を内容としたもので、年二回の発行を予定しております。次号は今秋発行を予定しておりますので、会員の皆様からの御投稿をお願い致します。

なお本誌の編集上のご批判も何卒宜敷くお願い致します。

昭和41年6月1日 発行

発行人 長谷川 肇
編集人 宇佐美 昭次
印刷 早稲田大学印刷所